建設系専門学校生による「建設業に対するイメージアップ」作文の部

最 優 秀 賞

「 建設業の現状とこれからの願い 」

東海工業専門学校金山校 土木工学科１年
中村 総

　私が土木の業界に興味を持ち始めたのは、父の影響でした。
幼少期のとき、父が担っていた工事現場に一度入り、思っていたよりもスケールの大きい仕事をしている後ろ姿に、惹かれたことを今でも昨日のことのように覚えています。
そしてもう一つは、隣町に通じるたった一本の国道が土砂崩れにより寸断され「最低一か月は物資が入ってこないだろう…」と言われていたほど大きな災害が私の生まれた年に起こりました。
その災害復旧の工事を私の父が請負い、たった三日で片側交互通行ができるまでやり遂げたことを母から聞き、土木業界は最前線で戦うヒーロー的存在だなと幼いころから思い続けています。
　そして、私はそのことから約 15 年後に土木を学べる高校に進学をしました。私が高校に入るまでは資格を一つも持っていませんでした。
最初に取った資格が玉掛けの技能講習で、一度とった時の達成感を覚え、次第に測量士補や２級土木施工管理技術検定をとるなど計９つも取りました。その姿を私の父は自分のことのように毎回喜んでくれて資格を取ることが楽しくなりました。
また、高校の時は、農業高校のため全員が FFJ（日本農業クラブ連盟）に加入し、その連盟の行事である意見発表会やプロジェクト発表会にも参加し、多くの経験をしました。意見発表会では自分の意見を述べるために、インターネットで下調べをしながら、参考になる資料を調べるといった技術を学べ、プロジェクト発表会では意見発表会とは違い単独行動ではなく、団体行動でプロジェクトが進行していくので、絆が深まったこともありましたが、誰かが違う行動をしてしまうと、チームの士気が下がるといった経験もでき、二つの発表会はそれぞれの意味があると分りました。
話が土木から離れましたが現場もチーム戦だと思うので、高校のうちに経験出来て良かったと思っています。
これらの功績により、FFJ 上級位検定も受け、合格することができ、自分をアピールする点が増えました。
　しかし、資格を取ると同時に責任がついてきます。
年に一度は必ずと言っていいほど、土木や建築の現場において事故が発生しています。なぜ、事故が起きるのだろうと考えると、自分の技量を過信してしまっているのだと思うのです。
報道番組を見ていると、経験の浅い若者が事故に巻き込まれているように思います。経験のある上司や同期など、行動する際に「報告・連絡・相談」の三つをしっかりと行っているのであれば、未然に防げたのではないかと思うような事故がやはり多いです。
私が通っている専門学校は土木だけでなく ISO という科目を習っています。この科目から教わっていることは Plan（計画）、Do（実行）、Check（測定・評価）、Action（対策・改善）というものです。私自身は専門学校に通うまでこの PDCA サイクルを知りませんでした。
当初、専門学校に入学するまではこの科目を習う意味が分からず、私の父が昔に ISO の認証取得を目指して少し触れていたことを聞き、座学だけでは身近に感じにくい科目なので、実際に経験していた人から聞くと何故か、すんなりと理解ができました。この科目がどう事故を未然に防ぐための近道なのかと、私なりにこう解釈をしてみました。
計画をまず立てないと日程や材料の量、機械の選別ができないと実行ができないし、実行した直後でないとしっかりとした評価ができない。それと同時に改善案を立てないとまた同じような過ちをするので、土木の現場は意外にも ISO の必要性を早く知れて良かったと思います。
よって、事故を防ぐためには仲間との連携が必要であり、意見の相違を無くすためのルール作りをしっかりするべきだと思います。
　このように、3K（きつい・汚い・危険）と思われている建設業は、確かに他の職業と比べて事故が多いと思います。それを未然に防ぐための意識づくり、ルール作りをしっかりと行っているのであれば、事故は減少していくでしょう。
そして、建設業に良い印象を世間に与え、災害時の最前線で戦うヒーローのような存在であり、日本経済を支える重要な仕事だと思って欲しいです。

建設系専門学校生による「建設業に対するイメージアップ」作文の部

優　秀　賞

「 イメージ改善 」

東海工業専門学校金山校　土木工学科　１年

石井　諒成

　私の父は土木会社を経営しています。父はまだ幼い私を車に乗せて、さまざまな場所に連れ出してくれました。その道中で父は決まって、自分が携わって造り上げた成果を私に自慢します。
そのほとんどが橋で、幼い私が興味を持つのも簡単でした。そんな私は、今年度から土木工学科に入学し、勉学に励んでいます。

　世間が建設業に抱くイメージと、私が建設業に抱くイメージに大きく相違は無い。
「汚い、きつい、危険。」イメージとして、この 3 つが印象的な職種。そう私は思いながらも、この職種に就くために学んでいる。
その理由として、専門学校に通う前年の夏休みに父に誘われ、実際に現場でアルバイトをしたことが大きく影響している。
運動なんてロクにしていない身体では、実際に現場で作業すると節々が疲労を訴え、汗が止まらない。
すると半日ともたずにへばる。
早朝に起き、猛暑日に長袖の作業服に身を包み、炎天下に晒され作業をする、というのはまさに、抱いていたイメージそのものだった。
汗だくになって休憩室に横たわる私を見て、従業員の皆さんが口々に言うのは、「苦労しながら段々と出来上がっていく様を日々感じながら、やっとのことで完成させたものが地図に残る。やりがいを感じずにはいられない。」というようなことで、特にやりがいを皆さん感じながらやっているようだった。
私はアルバイトを続けるなかで汚い、きつい、危険のイメージは強固なものになったが、それを嫌に思ってはいなかった。
なぜなら、私もまたやりがいを感じていたからこそ、この苦労が形となってできた物に対して、誇りをもっていたからだと、そう感じてこの職種について学ぼうと思った。

　あれだけ汗水垂らして疲れ果てていた運動不足の私だが、作業現場の環境としては快適だったように思う。
作業服には小型の扇風機のようなものがついており涼しく、生地も薄く軽い、それが全従業員についている。
猛暑などの影響でこまめに休憩がとられるようになった。
休憩室には冷房がついていて、冷蔵庫にはスポーツドリンクなど、十分に冷えた飲料がある。
特に驚いたのがトイレだった。仮設トイレには良い印象がなかったが、男女で分けられているし、清潔感すら感じるほど格段に良くなっていた。
世間の持つイメージと私の持つイメージに相違はないと言ったが、少し違う。
世間の言う汚い、きつい、危険、など様々なKがあるが、その言葉には「嫌さ」がある。 陰湿さを想起させる言葉には、どうしても嫌さや不快感というネガティブなイメージが付きまとってしまう。 しかし実際に私が感じたのは嫌さでも不快感でもなく、やりがいや達成感だった。
もちろん汗が垂れれば不快にも感じるが、私はそれをのちに誇りに感じた。
これがネガティブなイメージをまとう世間の 3K と、ポジティブなイメージもまとう私の 3K の違いである。

　3Kというネガティブなイメージは多分変えようがない。事実としてそうだと私は感じた。
しかしながら、世間のイメージよりも良くなっている部分もあるし、それどころか滅茶苦茶良くなっている部分もあるわけで、ポジティブなイメージと無理に紐づけて印象付ける必要もなく、自然と紐づく部分を多く感じた。 私は建設業に対してネガティブなイメージを持ちつつ、ポジティブなイメージも大事に抱えながら、この業界に就くために多くのことを学びたいと思います。

建設系専門学校生による「建設業に対するイメージアップ」作文の部

優　秀　賞

「 建設業に進む理由から考える 」

東海工業専門学校金山校　土木工学科　１年

五藤　慎也

私は今年の四月から専門学校で建設業のことを学ぶまで、建設業に関する知識は全くありませんでした。というのも、私は普通科の高校に進学し卒業した後は大学で法学を学んでいたからです。
父は自営で建設業を経営していますが、私は高校、大学ともに建設業に対して興味が無く、父の仕事を継いで建設業を経営するという考えはありませんでした。

そんな建設業に関わりも興味もなかった私がこの道に進もうと決めた理由は三つあります。

一つめの理由は、前々から地元に関わりの強い仕事に就きたいという意思があり、建設業であれば地元に深く貢献できると考えたからです。私の地元は生活環境が良く、とても暮らしやすいので、私は幼い頃から地元のことが好きでした。
そのため、大学を卒業した後も地元に貢献できる仕事に就きたいという思いがあり、建設業であれば直接的に地元に強い関わりをもって貢献することができると私は考えました。
他にも地元に貢献できる業種はいくつもありますが、建設業は私たちの生活環境を適切に管理する仕事であると考えているので、今までお世話になった地元の環境を今度は私が管理する立場になり、次の世代に繋げていけることができれば、それはとても素晴らしいことだと思い、建設業に進もうと考えました。

二つ目の理由は、自身の努力次第で将来的に高収入を得ることができる点です。
建設業は業種柄、体力をとても使う仕事ではあるものの、施工管理技士になり、規模の大きい現場を仕切る立場になることができれば、一般的な職業よりも高収入を得やすいと考えるからです。
毎年収入がほとんど変わらない仕事を続けるより、辛い仕事であっても、将来的に高収入を得ることができる可能性が高い仕事に私はやりがいを感じるため、私は建設業に進みたいと考えました。

三つ目の理由として、一人前の人間になって自分を変えたいと思いがあったからです。
私は今までの人生で将来について考えても、どうしてもやりたい仕事が見つからず、その場その場で将来の自分について考えることを止め、「いつか見つかるだろう」という楽観的な考えで過ごしてきました。
その結果、大学在学中に迷走してしまい、留年を一年、卒業後も就職はできませんでした。
そんなどうしようもない状態の私でしたが、とある人と出会い、関わりを持っていく中で、自分を変えなければいけないという意思がとても強くなっていきました。
また、このことがきっかけとなり、今まで会うことを避けてきた中学や高校の友人と交流をすることで、その思いはより強くなりました。自分を変えるために今何ができるのか考えたところ、せっかく父親が自営している会社があるのであれば、今からでも土木工学について学び、父親が取れなかった資格も取得し、安心して仕事を任されるような一人前の土木施工管理技士になりたいと考え、建設業に進もうと決めました。

以上の三つの理由から私は建設業の道に進み施工管理技士になることを決めました。
建設業の世間的な印象の中でよく挙がるのは、体力的に辛い、休日が十分に取れない、仕事量のわりに給料が少ないというものだと思います。
これらの印象からよりひどい言い方であれば、「最下層の仕事」であると考えている方もいると思います。
しかし、最近の建設業も変化してきており、十分な休日が与えられるようになってきています。
また、私が建設業に進むと決めた理由の中にもあるように、自身の努力次第で高収入を得ることができ、やりがいのある仕事であると私は考えます。
世間のイメージほど実際の建設業の労働環境は悪いわけではなく、どのような仕事にもその仕事特有の大変さがあるように、建設業にも建設業の大変さがあり、それと同時に、建設業にしかない良さがあると私は考えます。

建設業に興味のなかった私が建設業の良さに気づきこの道に進むと決めたように、多くの人々が建設業の良さに目を向け、興味を持てば、建設業のイメージも良くなり、同時に建設業の労働環境もより一層良くなっていくと私は考えます。